

平成 25 年度 第 5 回浦安市文化財審議会議事録（議事要旨）

- 1 開催日時 平成 26 年 1 月 15 日（水） 午前 10 時～12 時
- 2 開催場所 郷土博物館 視聴覚室
- 3 出席者
（委員）平野（敏）副委員長、杉山委員、丸山（光）委員、丸山（純）委員、吉田委員
（事務局）黒田教育長、石川生涯学習部長、加藤生涯学習部次長、飯塚館長、斎藤主幹、島村、林（記）
（傍聴人）なし

4 議 事

- (1) 企画展「浦安の海苔養殖」の視察及び意見聴取
- (2) 旧宇田川家住宅外壁改修工事について
- (3) 「収蔵品展」の開催結果報告
- (4) その他

5 会議経過

会議に先立ち、平野副委員長、黒田教育長があいさつを行った。

(1) 企画展「浦安の海苔養殖」についての視察と意見聴取

企画展示室を見学した後、意見聴取を行った。

かつての海苔養殖について、各委員からさまざまな情報をいただいた。これらについては、聞き取り情報として別途にまとめ、今後の展示や授業に活かしていくものとする。

議事録としては、展示内容の改善点や海苔すき体験授業についての意見のみを掲載する。

(委員) 子どもたちにわかりやすい展示になっていると思うが、他とリンクさせるよう、もう一工夫するとよいのではないか。

これまで子どもたちから寄せられた Q & A コーナーがあったが、番号をつけるなどして、展示してある資料とつながるようにするとよい。農業と海苔との関係も、海苔すき授業ではテーマ展示室内の航空写真を見せながら説明しているとのことだが、企画展のなかにも「テーマ展示室のどこを見るとよい」ということがわかるように案内表記をする。子どもが海苔簀編みをしている写真があるが、旧大塚家住宅のマネキン人形のモデルとなっているのがこの写真であると表記する。

例えば、ということだと思いついたことを述べたのだが、このように展示と他をリンクさせるような工夫をすることで、子どもたちの理解もより一層深まることと思う。

(委員) 海苔すきを体験させるというのは、子どもたちにとってはわかりやすく一番いい方法だと思う。

海苔すきは、自然(天気)に大きく左右される。晴れていれば、すいたものをすぐに干せるからよいのだが、昔は、雨が続きたりすると、すくことができず、そのまま寝かせておくことになってしまう。採ってきて一日置いてしまうと、海苔は半分くらいが死んでしまう。悪天気で、二日、三日海苔をすくことができず寝かせたままで置くと、その海苔をすいてみても「スミ」と言っ、まったく光(艶)がない海苔となり、売り物にならなくなってしまう。そういう海苔は、海苔簀からはがれにくく、破けてしまうことも多い。なので、海苔は海からとって来たらなるべく早いうちにすいて干してしまわなければならなかった。その後、「乾燥場」というものができて、室内で海苔を乾かせるようなやり方が広まっていった。

(委員) 乾燥場も、屋外展示場の中にありますよね。青いトタン屋根の小屋が、乾燥場なのでは？

(事務局) 屋外展示場に海苔製造場がある。天気が悪いときの海苔すき体験では、体験学習室を乾燥場にして行っているの、乾燥している様子なども子どもたちに見せている。昔の乾燥場の様子は、体験学習室前の廊下に当代島の方から寄贈していただいた写真を展示している。重油の大きいストーブで乾かしている写真を使い、説明している。

「良い海苔に仕上げるため、新鮮なうちにいち早くつくらなければならない」ということを子どもたちに理解させるため、次回は展示を工夫したい。

(委員) 海苔は、技術の進歩で発展していく産業である。例えばタネツケについていえば、昔は水温が下がったころ海に海苔網を張って、海中に漂う海苔のタネ(胞子)が自然に網に付着するのを待つだけであった。気候によっては、アオノリがたくさん付着してクロノリが育たなかったり、タネツケがうまくいかずに海苔網が汚れて全部だめになってしまう、ということも多々あった。その後、研究によって、春・夏の間、海苔の胞子はカキの貝殻のなかに潜んでいるということが発見され、その仕組みを利用した人工採苗が行われるようになった。人工的にタネを付けた網を、適した水温になった海に張り出すようになり、ある程度タネツケも安定して行うことができるようになった。

海苔の商売というものは、「博打(バクチ)」といわれるくらい気候に左右される難しい商売であった。そのため、小さな漁師は海苔には手を出さなかった。漁業組合から、組合員一人ひとりに対して海苔柵が12~13柵割り当てられるのであるが、小さな漁師はその権利を大きくやっている海苔漁師にすべて売ってしまう、ということも行われていた。

海苔は奥が深くいろいろあるので、海苔すきを体験させて理解させるという方法は、子どもたちにとって一番良いやり方だと思う。ただせっかくなので、子どもたちだけではなく、大人にも体験してもらいながら、海苔について広く学べるような機会を検討したらどうだろうか。

(委員) 今や、日本食は世界遺産だから、そのような意味でも海苔が果たす役割は大きい。

(委員) 「アサクサノリ」の語源についての質問を受けたりすることはあるのか？

- (事務局) 学校で行う事前学習や体験後の学習の中で、質問がでたりすることもある。
- (委員) 2年くらい前に大森の海苔の資料館に視察に行ったことがあったが、漁師あがりのたくさんのボランティアの方々が協力し、資料も数多く保存されていた。漁業については、浦安の「もやいの会」を含めて、まだまだ元気な漁師の方がご健在なので、子どもたちの質問にも適切に答えられるのではないかと思う。農業は、その点残念なのだが。
- (委員) 千葉に海苔養殖技術を伝えた近江屋甚兵衛という人は、どういう理由で海苔養殖技術の話をも浦安に持ちかけたのか？事業家なのか？
- (事務局) 近江屋甚兵衛は、江戸の四谷で海苔問屋をしていた人物と言われる。自分の事業を拡大するために、多くの海苔を仕入れようとしたのであろう。江戸の漁場は場所的にも限界があったため、他の場所を探し求めて、浦安へ話をもちかけたものである。新たな地で海苔養殖技術を教え、そこで採れた海苔はすべて自分が取り扱う、という目論見があったのだらう。
- (委員) 浦安の海苔問屋さんは、地元の方ではなく、長野や山梨など信州からの人が多い。
- (委員) 長野の方々が資本を投じて、大森で商売をし、そこから浦安へと広がっていったものだと聞く。
地元の人では、問屋という商売が成り立ちにくかったのではないか。浦安生まれ・浦安育ちの人では、大きな商人にはなれなかったようだ。儲けたりすると、あれこれ言われたりするものだから。
- (委員) 浦安は、密集した小さい町で、親類縁者が入れ組んでいる。そういう意味では、地元のなかで商売を行うのはやりづらかったのだらう。逆に、都内など他の場所で商売するには問題がなかった。行商など、みな都内で行っていた。

(2) 旧宇田川家住宅外壁改修工事について

配布資料に基づき、事務局より説明した。

- (委員) 「房総石の礎石の交換」という話があったが、この工程表でいうと、どこにあたるのか？「礎石(そせき)」ではなく、「束石(つかいし)」のことではないのか？
- (事務局) 工程表、上から7つ目の「束石工事」と書かれたところで、柱の下の石部分になる。

※ここで、事務局より、改めて工事箇所を示した平面見取図を配布した。

- (委員) 柱の礎石か？柱の礎石を交換するとなると、大工事になると思うが。
- (事務局) 店舗側の仕切りがあるところのことで、敷いてある石の交換になる。5年前に樹脂を含浸させて腐朽を止める工事を行ったのだが、腐朽が止まらず、今回石屋にお願いをして石ごと交換する工事を行う。以前に古民家を専門的に扱う業者に調査をお願いしたところ、全体的に建物がフラワー通

り側に少し傾いているという報告があった。この石が傾きの原因のすべてではないが、これ以上店舗側に負荷がかからないよう、石を交換することにした。

(委員) 建物が傾いているのは、石が原因ではない。それは、地盤の問題であり、地盤改良という大工事になってしまう。今回交換するのは、柱を支えている礎石ではなく地覆石のことか？ 梁を受けている柱の下にある石を交換するということになると、大変な工事になるはず。みただけのことを考えてやってしまうと、かえって建物にとってはよくないということもあり心配なので、今どういうことをやろうとしているのかということを中心に調べて、改めて報告してほしい。

(事務局) これについては、改めて説明資料をつくり、議事録と一緒に送ります。

(3) 「収蔵品展」の開催結果報告

配布資料に基づき、事務局より説明した。

主な質疑・応答は、下記のとおり。

(委員) 博物館だけではなく、公民館など他の場所で資料を紹介するということではできないものか？ 高齢の方は博物館まで足を運ぶのが難しい方もいる。市内のいろいろな場所で展示すると、多くの方々に見てもらえるのではないかと思う。

(事務局) 公民館などで展示ができればと思うが、ポスターなどを含めて博物館の実物資料は1点限りのものなので、鍵のかかるケースに入れるなどの安全が確保されない限りは、他施設への貸し出し・展示は難しい。展示ケースごと貸し出すということになると思う。それらの条件を整えば、博物館としても、是非他の場所で開催できればと考える。

(委員) 『青べか物語』は、あくまで山本周五郎を通したインタープリテーション(interpretation： 解釈)であって、歴史・史実とは異なるものである。映画化は、それをさらにインタープリートしているものなのであるから、作品として楽しむものであって、そこに歴史を探そうとしても無理がある。

(委員) 映画はどこでやったのか？

(事務局) この視聴覚室で開催した。最大80席である。フィルムは図書館が所蔵しており、図書館ではこれまでも時々上映会を開催しているのだが、今回申込みが殺到し、定員いっぱいまで断わざるを得ない状況であった。また上映の機会をつくりたいと思っている。

(委員) 山本周五郎の直筆の原稿があったと思うが、今回展示したのか？

(事務局) 展示した。

(委員) 吉野屋以外に、山本周五郎にゆかりのあるような場所が現在も残っているのか？

(事務局) 周五郎が滞在していた場所などについて、博物館の建設準備のなかで力を入れて調査を行ったのだが、残念ながら周五郎について記憶があるという人はほとんど見つからなかった。

(委員) 貝灰工場は、実際にあったのか？

(事務局) 周五郎の小説のモデルとなった貝灰工場は、西水門の手前、境川沿いの堀江側の角にあった。そのほか、当代島にもあった。

(事務局) 先ほどご意見をいただいたように、『青べか物語』は、小説も映画も、「作品として楽しんでもらう」ということをもう少し強調していく必要があるかと思う。『青べか物語』が、浦安を表す代名詞として大きくなってしまったようなところがある。年末、『青べか物語』の地として、浦安が新聞に大きく取り上げられていた。小説のなかの現在の情景ということで、浦安ではなく新井にあるマンションの写真が掲載されていた。今の人たちは、そのような捉え方をしている。

私は、『青べか物語』を通した歴史と現在とのつなぎの部分として、今回展示されていた「映画のロケーションハンティング写真」(川島雄三監督ら撮影スタッフが、映画の撮影場所を決めるための下見を行った際の風景写真一式)をもっと大きく取り上げて紹介したいと思っている。展示のときは、小さいサイズのままであったが、これを大きく伸ばして、これだけで展示会をやってもいいのではないか。埋め立て前の浦安風景のなか、映画の撮影がこうして行われていったということを紹介することで、映画作品としての価値も浮き上がってくるのではないかと思う。

浦安高校が40周年になるのだが、写真部が当時からあり30年前の浦安を撮っていた生徒がいた、という話が最近あった。そのような写真も、浦安にとっては非常に貴重な資料になるので、紹介していくことも大切かと思う。

(委員) 映画公開当時、浦安の印象について、この映画が与えた影響は非常に大きいものがあつたのではないかと思う。ちょうどそのころ、私がカントリー&ウエスタン(アメリカ音楽のジャンル)のある発表会に参加したとき、そのときのメンバーの一人が「浦安出身です」と言ったとたんに会場から笑いが起きたことを覚えている。そのときは、なぜ笑いが起きているのか意味が全然わからなかったが、この映画の影響だったのかもしれない。

(4) その他

(委員) 先ほど追加で配布いただいた海苔の資料について、説明いただきたい。

(事務局) 小学校で使っている社会科の副読本のコピーである。この副読本に合わせて、海苔の展示・授業を行っているので、参考のために配布した。

(委員) 細かいことであるが、郷土を「きょう土」、漁師を「漁し」と表記してあるが、漢字にして全体に振り仮名をつけた方がわかりやすいのではないか。

(事務局) 副読本は指導課で作成しているので、指導課に検討させたい。基本的には、その学年までに習わない漢字は使わないようにしているのだが、「郷土博物館」というところは「郷土」と表記してあり統一感がない。

副読本は、教科書と違い、市で制作しているものなので、市としての考え方でつくることができる。改めて検討したい。

◆ 次回の会議

次回、第6回浦安市文化財審議会は、3月19日(水)に開催する予定である。

以上をもって、平成25年度第5回浦安市文化財審議会は、閉会した。